00 地方都市における建築の在り方

現在日本全国で少子高齢化に伴う人口減少が進む。限界集落、消滅集落と呼ばれる地域も年々増加し、多くの自治体が税収減に悩まされている。これらの地域において、建築はどのような役割を担い、人々に何をあたえることができるのだろうか。本計画を通して、衰退する地方における都市の縮小とそれに伴う建築のあるべき姿を追求する。

01 最北の城下町 - 北海道 松前 -

北海道の南端に位置する人口 6 千人弱の小さなまちである。かつて蝦夷地を統治した松前藩のおひざ元であったこのまちは激動の時代を歩んできた。北前船の寄港としてアイヌとの交易を一手に担い、まちは発展した。幕末の戊辰戦争で旧幕府軍によって攻められ落城。まちの 3/4 が焼失した。その後ニシンが獲れなくなり基幹産業である漁業が衰退し、幾度となく大火に見舞われ、昭和 2 4 年には国宝に指定されておりまちの人々の誇りであった天守が、城の麓にある役場の火災が移り炎上した。その後も衰退の一途をたどり最盛期には 1 万人ともいわれた人口は減り続けている。現在は松前城内に咲く桜と松前漬けなどの海産物を売りに観光業で再生を図っている。

02 問題提起 - 城とまちの今後の在り方について -

松前町ではさらなる観光客の獲得に向けて、城と歴史を軸に計画を行っている。1961 年に再建された天守が老朽化で耐震性が危ぶまれており、30 億円をかけ木造での再建を計画している。また、江戸時代の奉行所や町屋を再現したテーマパーク松前藩屋敷の再整備も進めていく見込みである。たしかにこれらの計画は歴史を伝承していき、来町者にまちも魅力を伝えることだろう。しかし、衰退しきった現在の町の状況で多額の予算を使ってこれらの計画を推し進めることはまちにとって最適なのだろうか。い現在ままちの人々が求めていることはほかにあるのではないだろうか。そこでこれらの実際に進む計画に対して、松前というまちと城の今後の在り方を指し示すような建築を提案する。。

03 松前城とまちの変遷

城はこのまちの中心に建てられ、時代の変化を常に受け止め続けてきた。もともとは和人とアイヌ民族がともに住んでいることから名づけられた地名であり、そこに蠣崎氏が治めるようになり松前の歴史は始まった。その中でまちと城にとって大きな転機は以下の年表で示す。松前藩の成立によりまちの中心に福山館という屋敷が作られた。そして江戸時代末期、外国船の襲来から国を守るため幕命により三の丸台場が拡張され 7 基の砲台が置かれ、二の丸、本丸は江戸軍学の粋を尽くした近代城郭最後の城として 1850 年に建てられた。その後、明治になり城は解体され戦時中にはマンガンを運ぶための鉄道を通すため本丸地下にトンネルを掘り、本丸御殿跡にはその門を利用した北海道最古の小学校である松城小学校が建てられ、多くの子どもたちを輩出した。またまちの拡大と共に多くの住宅や建物が建てられ、城とまちの境界はいつしか崩れていった。その後住宅などは解体され大規模な発掘調査が行われ、二の丸の復元が行われ城は現在の姿となった。しかし観光地化された城とまちの間には距離が生まれ、それを象徴するのが三の丸とまちの境界となっている石垣である。

04 公共建築の郊外化と城の観光地化

まちの拡大に対して消防署や高等学校といった公共建築、またまちの人々の暮らしを支える商店などもまちの中心から姿を消し、まち外れにロードサイドショップ的に展開されている。函館 - 松前間をつないでいた鉄道も 1988 年に廃止され、駅前商店街は廃れていった。城はまちのシンボルとして観光業の中心的役割を担ってきたが、徐々にまちの人々の生活とは距離が離れていった。現在では「1 年間で桜の季節だけしか人が来ない」という状況である。

05 提案

城はまちの変化を受け止め続けてきた。ある意味では記憶の器ともいえる。その象徴であり、まちとの境界にあたる三の丸台場の石垣 (土塁) に設計を行う。城に藩主が住み、まちの治めた時代、藩制が崩れ城が空白となった時代、激動の時代により城が傷付けられた時代、まちの拡大により暮らしが城の中に入り込んだ時代。これらの時期を経て、まちが縮小し、城とまちに隔たりが生まれつつある現代において、「城がまちへ歩み寄る」ような建築の形があるのではないだろうか。城が本来持っていた場所性や空間性を現代の松前の人々がくつろぐ縁側的空間に作りかえていく。城とまちの間にその歴史を映し出すフィルターのようなあるいは半透明な膜のような建築を作る。それが城からまちへ、減少する地方において都市構造の一部となっている城郭に対して設計を行うことによりこれからの時代、松前をそっとともし続けていくような、そんな灯のような建築を提案する。

【機能】

現在の中心市街地にはまちの人々が日常を過ごす居場所はない。また観光機能は町はずれに分散しており十分に利用されていない状況である。

まちの人々のためのパブリックスペース＋観光客の休憩所、案内所、展示コーナー

↓

まちの人々と観光客が交ざりあうことにより、この先も城が中心となって人々の暮らしを支えていく。
その象徴ともいえる場所がまちとの接点である三の丸の石垣にあらわれる

城とまちの際の変遷

1600 年
山中にあった大館が移転し、福山館が作られる

松前藩が成立し屋敷が出来る。境界には有力家臣の屋敷が建つ

1800 年
幕命により、三の丸を拡張、近世城郭に

三の丸が拡張され、砲台を備えた台場に

明治
役目を終え、城は解体

昭和~
城内に松城小学校、住宅が建設されトンネルが開通

城内にまちが侵入、里山的に使われる様子も

平成~
二の丸などを整備、住宅は解体され造成の跡が残る

史跡となり、住宅等は壊される。まちとの間に大きな隔たりができる

06　コンセプトー石垣から縁側へー

城は変化を受け止め続けてきた。ある意味では記憶の器ともいえる。その象徴でありまちとの境界にあたる三の丸台場の石垣 (土塁) に設計を行う
もともとは防御の最前線だった城郭を人々を呼び込み、くつろぐことのできる空間に変えていく。城が本来持っていた場所性や空間性を現代の松前の人々がくつろぐことのできる概念としての縁側的空間に作りかえていく。それはまちの人々が日常を過ごす場所であり、観光客が滞在し松前の魅力を感じる空間となる。現代の松前の生命線である観光業の拠点として、同時に地域の人々の居場所としてこのまちの心臓となる建築を提案する。城の「守り」の仕掛けを現代の街づくりにおける「攻め」の空間へと転換する。

07 設計主旨ー城からまちへ歩み寄る建築のかたちー

城郭が持つ敵の侵入を防ぎ撃退するための工夫を、人々を受け入れ呼び込む居場所となる空間に作り変える。城が持つ防御のシステムの中で空間に落とし込めそうな要素を以下のように抽出した。そして再解釈し、組み合わせることにより城から形作られる空間を形成する。それはまるで城からまちへ寄り添っていくような建築の在り方であり、これからの城とまちの関係性としてあるべき姿なのではないだろうか。

08 リサーチ - 日本式城郭最後の城にして砲台を持つ城 -

松前城は江戸時代末期に外国船の襲来に備え築城された。その際江戸軍学を極めた市川一学によって日本式の城郭形式で作られる。また、海からくる敵の襲来に備え、7 基の砲台を備えた。日本式でありながら西洋式の大砲を兼ね備えた和洋折衷がこの城の特異性である。それらの城郭は明治の廃城で一度は取り壊されるが、天守と大手門はまちのシンボルとして残りつづけた。その特徴がもっとも表れている三の丸とまちの境界において、城からまちへ歩み寄るような建築の形を考える。その手掛かりとして守りの仕掛けである城郭の要素に着目し、抽出、分析を行う。

09 城郭的エレメントの分析

松前城にみられる日本式の城郭要素と西欧式の城郭要素から建築空間に昇華する可能性を持ったつくりを「城郭的エレメント」と名づけ、抽出する。
松前城において以下のような城の戦いの仕掛け、「城郭的エレメント」が挙げられる。それらを 1. 空間性を再現する 2. 意味や仕組みを拡張する 3. 使われ方や仕掛けを読み替える、そして以上のものを複合し組み合わせることにより、城郭的要素から作られる空間の可能性を探る。

10 城郭的エレメントの読み替えによる 6 つの手法

左に示した城郭的エレメントを読み替え、組み合わせることにより新たな空間構成の可能性を探る。先に示した城郭的エレメントの読み替えと組み合わせにより建築に応用可能な要素を下記に示す。これらを織り交ぜながら建築の構成を進めていく。

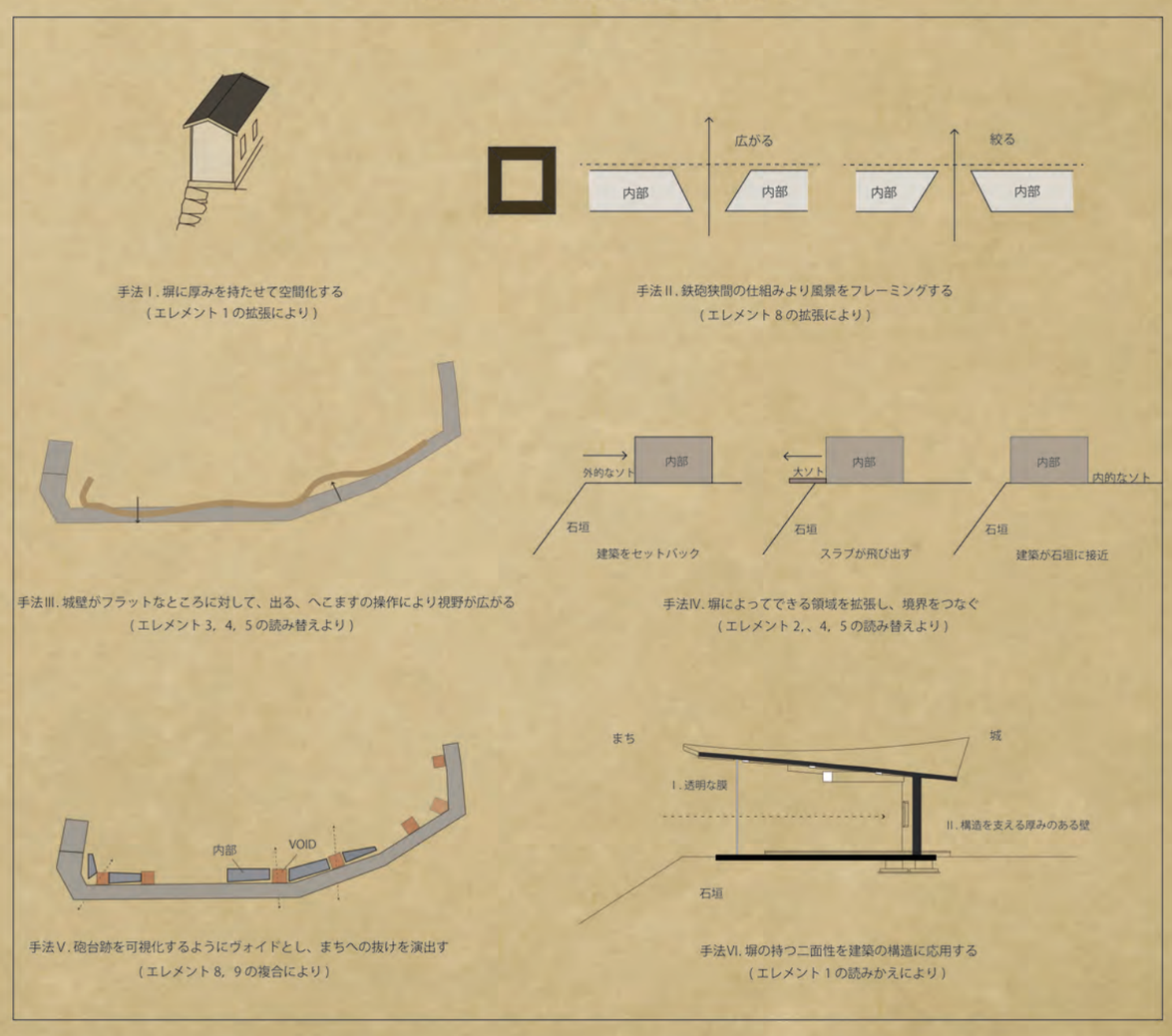
手法 I . 塀に厚みを持たせて空間化する
手法 II . 鉄砲狭間の仕組みより風景をフレーミングする
手法 III . 城壁の折れに対して場所ごとにスラブが変化する
手法 IV . 塀によってできる領域を拡張し、境界をつなぐ
手法 V . 砲台跡を可視化するようにヴォイドとし、まちへの抜けを演出する
手法 VI . 塀の持つ二面性を建築の構造に応用する

上記の手法に加え、城郭的エレメントやその空間性などを体感させるつくりを平面、立面、断面素 r それの計画で行っていく。

【城郭的エレメント】

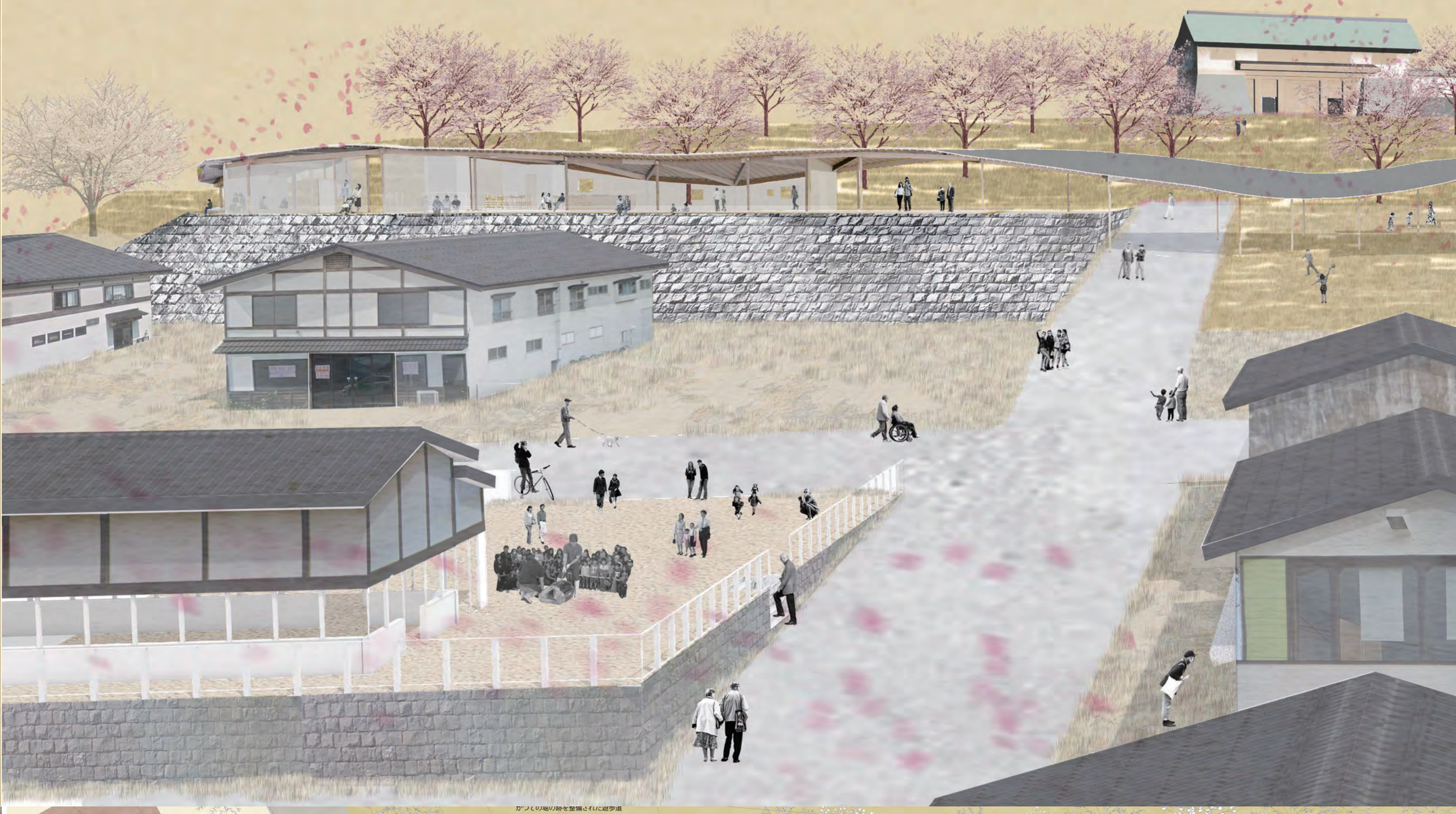
読み替え

【城郭的エレメントの読み替えによる城郭的手法】

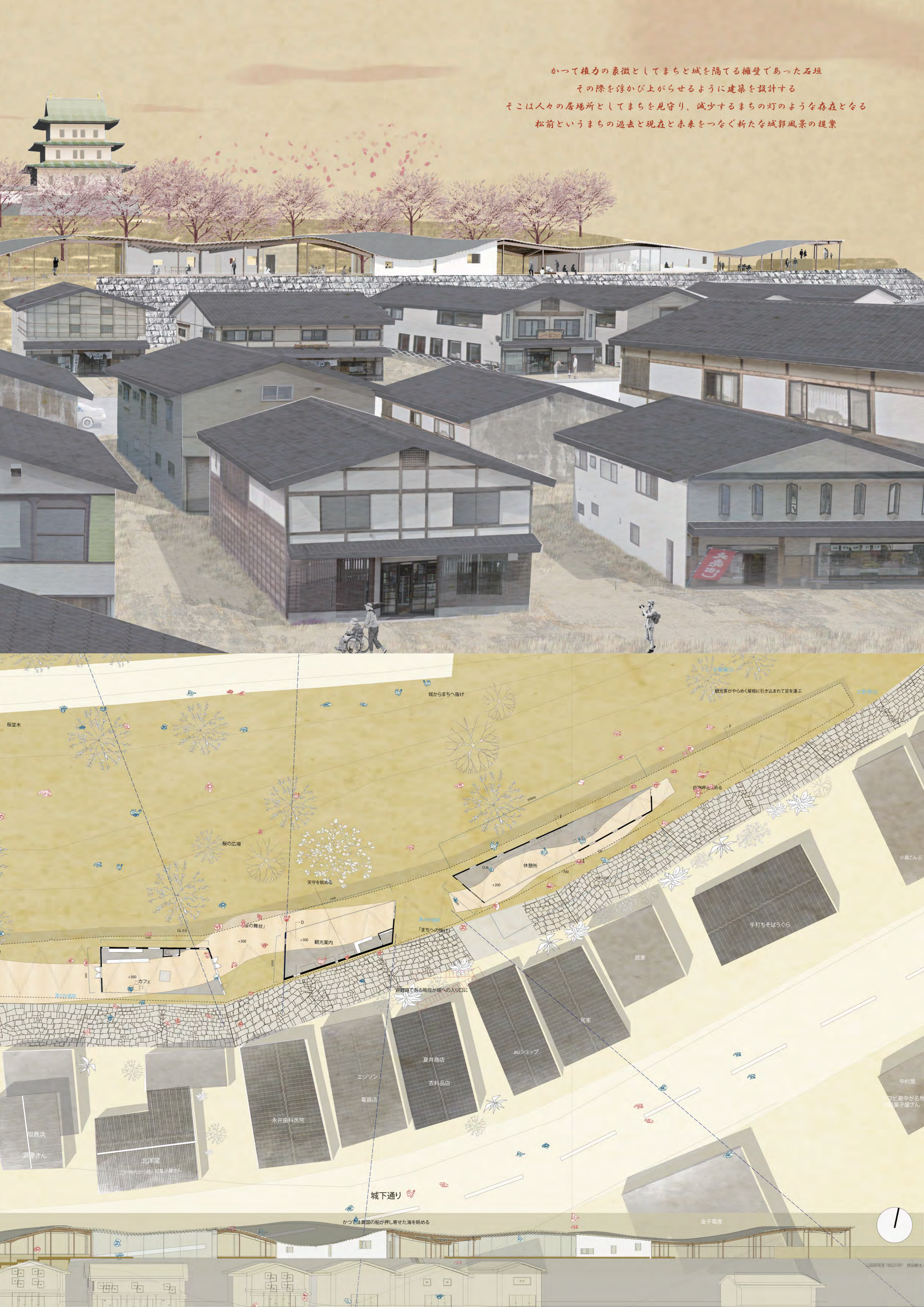


城郭に坐る

- 松前城再編による新たな城郭風景の提案 -



かつて権力の象徴としてまちと城を隔てる擁壁であった石垣
その際を浮かび上がらせるように建築を設計する
そこは人々の居場所としてまちを見守り、減少するまちの灯のような存在となる
松前というまちの過去と現在と未来をつなぐ新たな城郭風景の提案



遊歩道と接続する形で建築が始まる。人々の休憩所となる。

建築の間にできる抜けはかつての砲台の跡を空間化し、まちへの抜けを作る

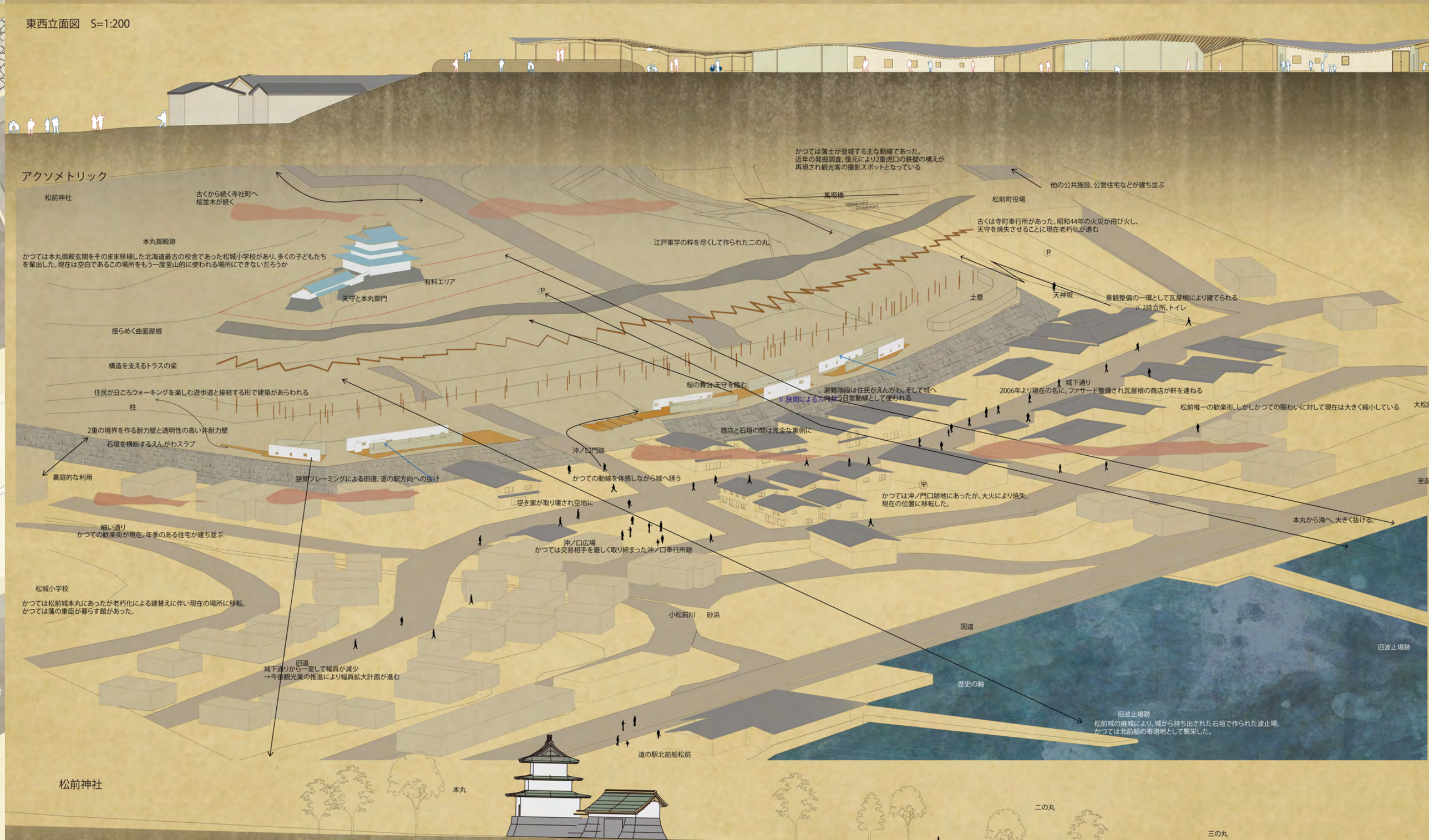
大きく張り出した縁側デッキから海を一望する

集会スペースからまちと海を見渡す

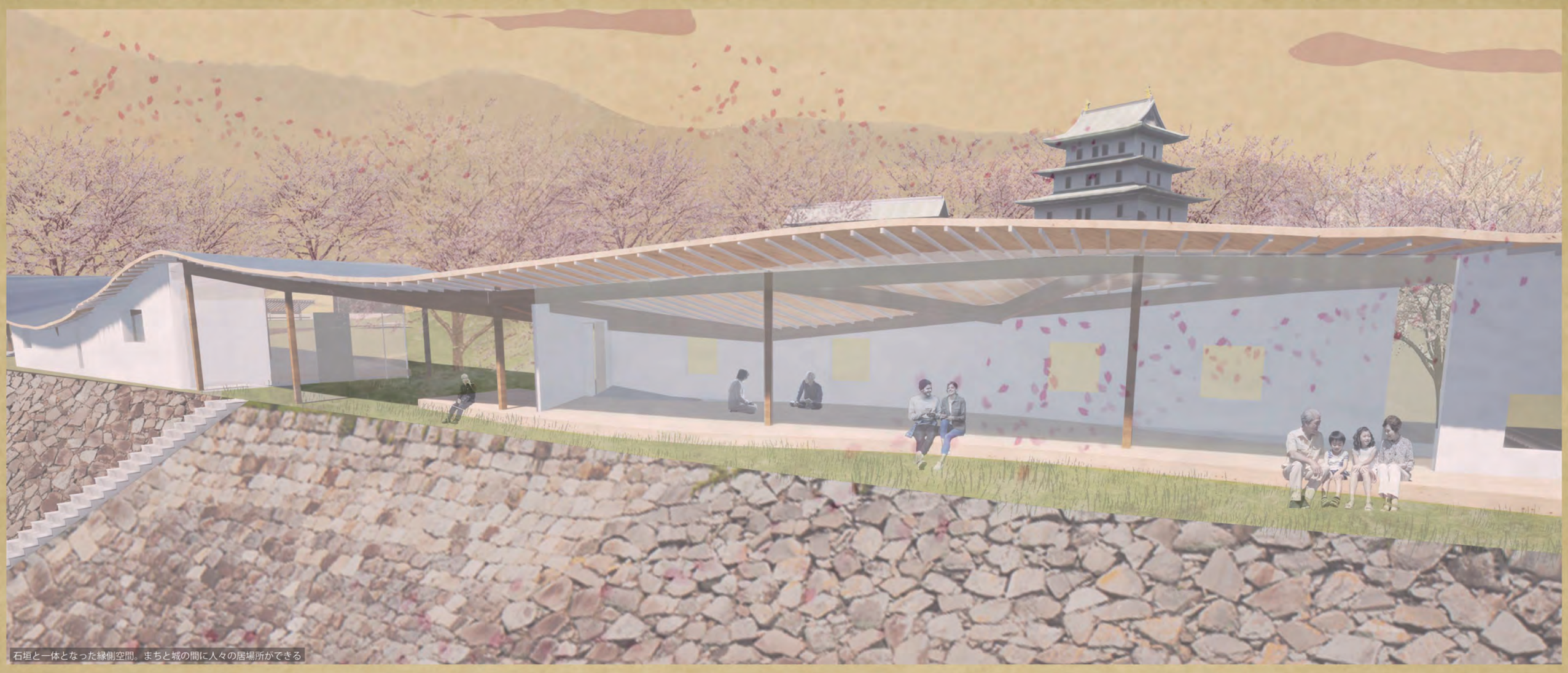
沖の口門の動線を追体験する城へのアプローチ

城下通りより眺める。建築が城の境界を浮かび上がらせ、まちに新たな風景をつくりだす

東西立面図　S=1:200

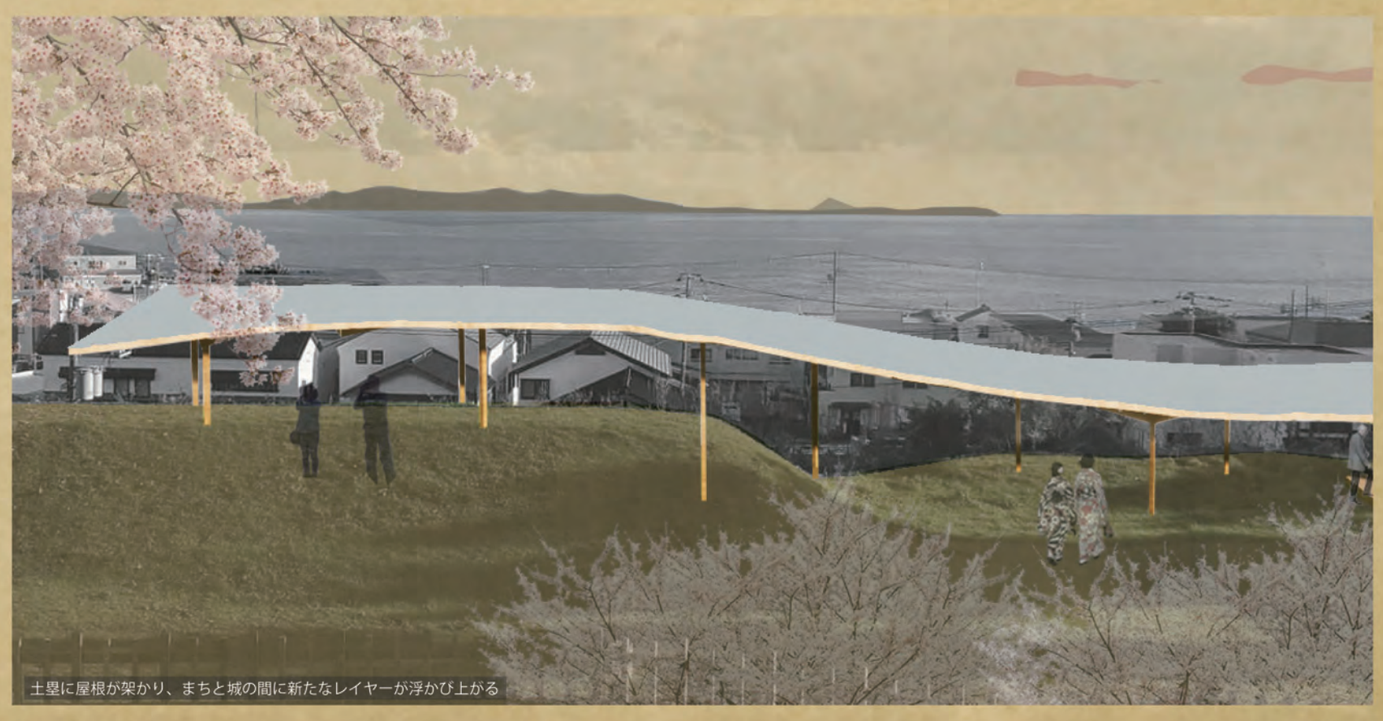


C-C' 断面図　S=1:300



石垣と一体となった縁側空間。まちと城の間に人々の居場所ができる

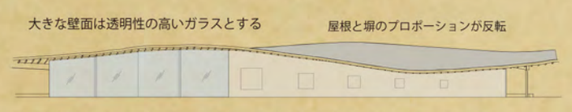
休憩所を眺める。掘りこまれて一段低い空間から城とまちを眺める



土塁に屋根が架かり、まちと城の間に新たなレイヤーが浮かび上がる

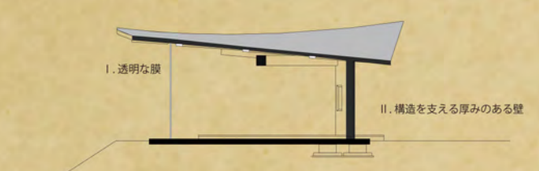
□立面ダイアグラム　城とまちの関係性によって、屋根がゆらぐ

土塀は石垣の上に聳え立ち、折れ曲がり、狭間という敵を狙う銃口を空けながらまちに対して美しく建っている。その塀が持つ防御の構えを分解し、再構成することによりまちと城の間に両者をときにつなぎ、ときに程よく区切るようなフィルターをつくりだす。2 面性がまちと城に対して反転しながら連続的に様々な趣の顔を見せる。

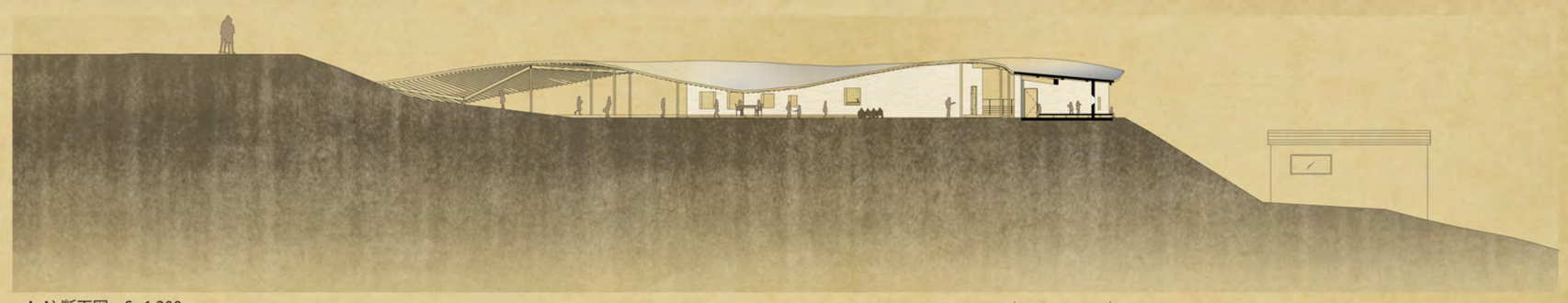


□断面ダイアグラム - 塀の持つ二面性を 2 枚のフィルターに置き換える -

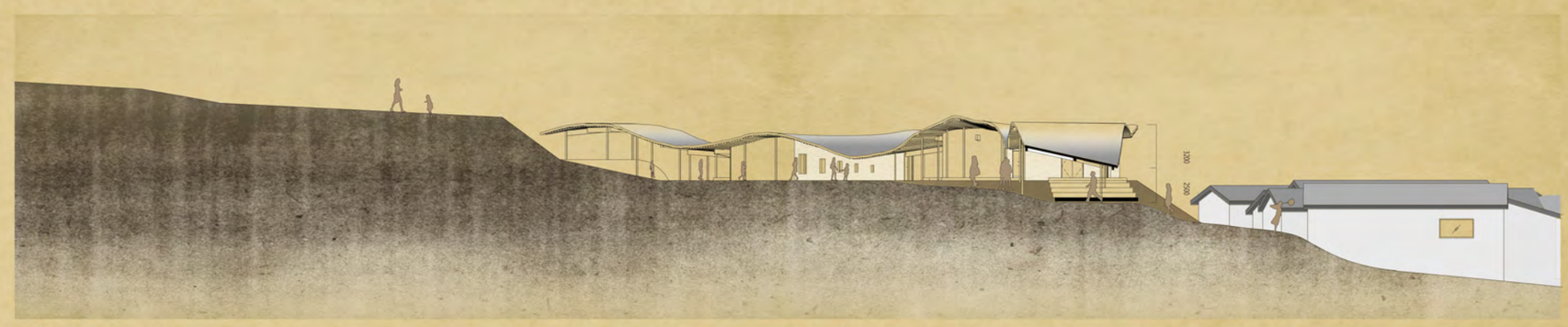
石垣の上に聳え立つ土塀は守りの構えとして美しく見える。しかし、城側に立って見ると一転、木の設えと構造を支える控え柱が姿を現す。このような城のもつ兵器としての面と権力の象徴としての美しい面の 2 つの顔を建築に取り込む。



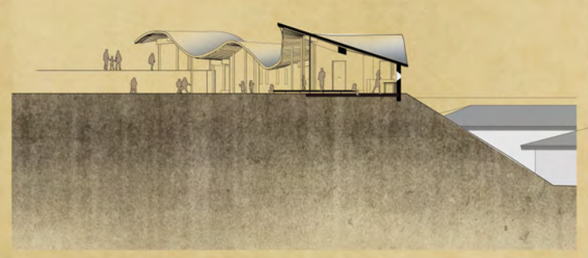
屋根の揺らぎと呼応して二つの膜が反転しながら、石垣の上に新たな境界を構成する。それは敵の侵入を防ぐための防衛のためのシェルターとしての境界をまちと城の中間領域として作り変える。かつての歴史に想いを馳せながら、今後のまちの生存戦略の拠点ともなるこの建築は 2 つの膜の反転と石垣、城、まちとの関係性により、場所ごとに多様で原初的な居場所を生む。



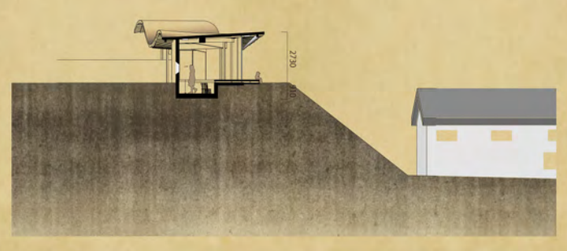
A-A` 断面図　S=1:200



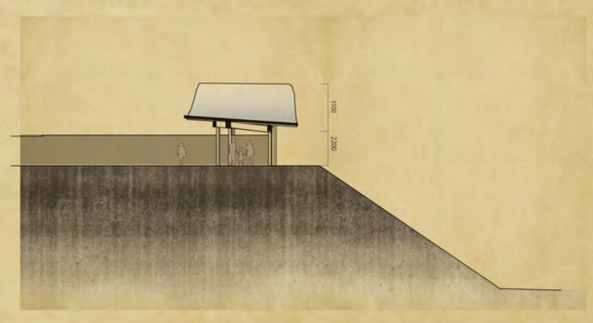
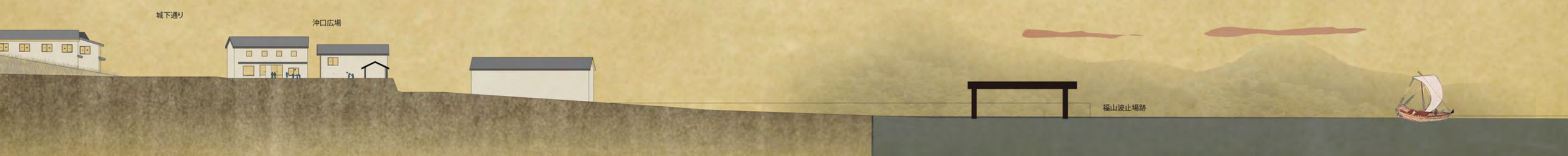
C-C` 断面図　S=1:200



D-D` 断面図　S=1:200



E-E` 断面図　S=1200



F-F` 断面図　S=1:200